

れの記憶をもとに「炭鉱文化」を後世に伝えようとする活動が行なわれている。しかし、閉山から時間が経ち、関係者の高齢化等による記憶の風化、資料の散逸が進んでいる。そして、旧産炭地自治体における財政状況の極度の疲弊と人口流失による地域活力の減退が「炭鉱文化」の継承を危機的状況に追い詰めている。財政再建団体となった夕張市は、その端的なものである。

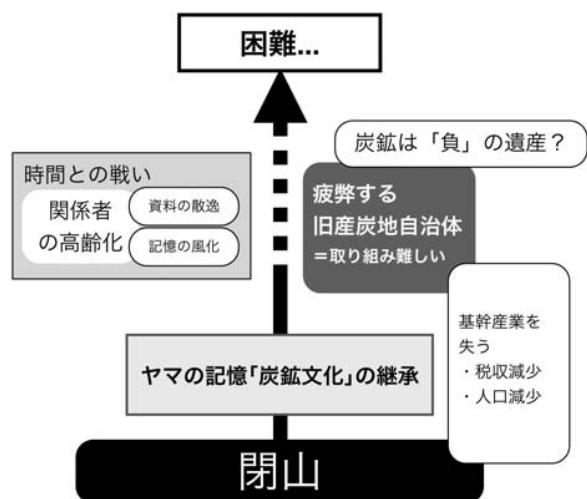


図2. 「記憶の継承」の問題点

2. 「記憶の継承」に向けての課題

2-1. 地域内

釧路市にわが国唯一の現役の炭鉱があることは、地域においても大きな技術資産であり、同時にわが国石炭産業の「最終地」として、炭鉱文化の継承と活用にも大きな責務をもつともいえる。

太平洋炭礦と太平洋炭鉱労働組合から釧路市総務部地域史料室(旧市史編さん室)が引き継ぎ、所蔵することとなった炭鉱資料について、写真や経営・労組資料、社内報や組合報を中心に「太平洋炭礦資料室」に収蔵されている。炭鉱管理職OBらによる「太平洋炭礦管理職釧路倶楽部」が、現役当時の豊富な経験と人的繋がりを生かして整理を継続的に行っており、内外から評価が高い。しかし、市内小学校の空き教室を利用していることから資料室の公開は限定的で、一般向けには年1～2日程度の一部展示がその中心であった。博物館でも、これまで炭鉱にかかわる講座や企画展を断続的に開催しており、資料調査等において太平洋炭礦管理職釧路倶楽部および市地域史料室の協力を得てきたが、それは継続性には欠ける、部分的、ややもすると当館からの一方的な協力依頼にとどまることもあった。また、企画展等の開催ができては図録作成等が困難で、せっかく博物館へ集まってきた情報も、それ以降の継続的な活用に限界があった。

このように、地域内での炭鉱資料の連携活用体制の構築が、次世代への引継ぎも見据えたときの課題として存在していた。太平洋炭礦管理職釧路倶楽部(経験者)と

地域史料室(アーカイブ)、そして博物館(ミュージアム)が核となり、ひろく一般市民・炭鉱関係者などに呼びかけ、これまでの技術論文や経営資料だけでなく、釧路での「炭鉱文化」にかかわる情報を集積し、相互連携での資料管理と公開、なにより活用を行なっていくための基盤整備の必要性を痛感していた。

もちろん、炭鉱(石炭産業)だけでなく、地域を形成してきた他産業においても同様な取り組みが必要であることは言うまでもない。

2-2. (旧)産炭地間

平成20(2008)年度に、釧路市立博物館では石炭関連展示として、長崎県の無人島になった炭鉱を紹介した企画展「軍艦島～消えた炭鉱集落」(共催:長崎市・NPO法人軍艦島を世界遺産にする会)、また明治～昭和に生きた炭鉱労働者が描いた画文から炭鉱の歴史を考える交流企画展「炭坑(ヤマ)の語り部 山本作兵衛の世界」(共催:田川市石炭・歴史博物館)を開催した。これらは、学芸員・研究者・地域振興行政担当者等の個人的繋がりから発展させ、開催となった。開催から、石炭という「同じ記憶を持つ」地域同士の交流から見えてくるものは大きいことを再認識した。

地方、特に(旧)産炭地の疲弊はさらに深刻化しており、それは所在する博物館も当然ながら同様である。しかし、博物館の持つさまざまな蓄積は、地域の再生において多くの基盤情報を提供する。地域の成り立ちや特性を無視しては、その再生は不可能であるといっても過言ではない。当館も「マチの知恵袋」としての機能へも期待が寄せられるようになっている⁽²⁾。

また、炭鉱が一方的に単なる郷愁の対象であったり、負のイメージとして書かれることもしばしばであり、世代間交流と継承にもそれは隘路となる。これは「地域の記憶」に丹念に当たっていないことにその原因がある。負のイメージという先入観をまず取り除き、ありのままに炭鉱を捉えるという動きが出始めている。しかし、まだそれは地域内、しかも一部の認識の変化にとどまっている。

各地域博物館を中心として情報交流と活動連携を行ない、他の地域との比較を行うことは、自らの地域を理解し愛着と誇りを持てるような、多くの素材を市民に提供することが可能である。

また、「語り部事業」や「博物館と市民(研究)団体の協働」など、他地域の先進的な手法に学ぶことがまず必要であった。また当地域の炭鉱文化を日本石炭産業史の中で位置づけることも重要で、他産炭地との交流がこれまで以上に求められていた。

優れた点や問題点を相互に学びあい、学芸員・研究者個人間から博物館間、そして地域間の連携へと発展させ、それを継続させていくためには、ネットワークの形成も不可欠である。

3. 「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」地域内・地域間連携事業

3-1. 文化庁支援事業への採択

これら諸課題の解決と、博物館活動の発展に向け「『炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶』地域内・地域間連携事業」とし、平成21年度文化庁「美術館・博物館活動基盤整備支援事業」の採択を得て、以下の2つの交流を目標として各事業を実施した。特に図録の制作、フォーラム出席者の招聘・炭鉱文化調査に関わる旅費等については、同支援事業採択によって実施が可能となった。

なお、釧路市内には、太平洋炭礦・雄別炭礦・尺別炭礦があったが、まず「太平洋炭礦資料室」に資料が所蔵され、その整理の進んでいる太平洋炭礦をテーマとした。

【地域内交流】 当館と、炭鉱に関する豊富な経験と情報・人脈を持つ太平洋炭礦管理職釧路倶楽部、地域アーカイブである釧路市総務部地域史料室がそれぞれの「得意分野・手法」を生かし、強力な連携・協働により、写真を中心とした記録化を実現する。

【地域間交流】 石炭産業における歴史の重層性があり、わが国を代表する産炭地である筑豊炭田に所在する田川市石炭・歴史博物館と、極めて厳しい財政状況ながら石炭産業をテーマに市民協働で博物館発信の街づくりがなされている「歌志内市郷土館ゆめつむぎ」の市民支援組織「ゆめつむぎ通信員」との連携を図り、他産炭地の炭鉱文化とその継承について市民に学ぶ機会を設ける。

3-2. 展開した事業

展開にあたっては、下記3者による「展示等検討委員会」を組織して事業を進行した。

【展示等検討委員会】

釧路市立博物館（戸田 恭司・石川 孝織）
太平洋炭礦管理職釧路倶楽部（佐藤 富喜雄・照井 茂幸）
釧路市総務部地域史料室（氏橋 隆次・山本 修嗣）

（1）特別展「炭鉱（ヤマ）のくらし・マチの記憶」

会 期：平成21年11月7日(土)～12月13日(日)

会 場：釧路市立博物館 1階マンモスホール

主 催：釧路市立博物館／太平洋炭礦管理職釧路倶楽部
／釧路市地域史料室

協 力：太平洋退職者・離職者協議会／田川市石炭・歴史博物館／歌志内市郷土館ゆめつむぎ／歌志内市郷土館支援組織「ゆめつむぎ通信員」
／ゆうばり三番方倶楽部／夕張地域史研究資料調査室

来場者：2,135名

昭和20年代から現在にかけての約3,000枚の写真から、「編集委員会」にて、「しごと」「くらし」の各テーマに沿って、非常に多くの時間をかけ検討した。

【編集委員】

太平洋炭礦管理職釧路倶楽部：佐藤 富喜雄・照井 茂幸・

坂田 元・川瀬 忠男・日向 文久・安田 進
釧路市立博物館：石川 孝織

240枚を選び、うち120枚を解説や思い出を記したパネルとともに掲出、また残り120枚とあわせてパソコンを使ったスライドショーで展示した。

加えて、太平洋炭礦の紹介ビデオ作品の上映、毎土・日曜は太平洋炭礦管理職釧路倶楽部会員による展示解説を実施した。



写真1. 展示・図録写真選定作業



写真2. 特別展会場

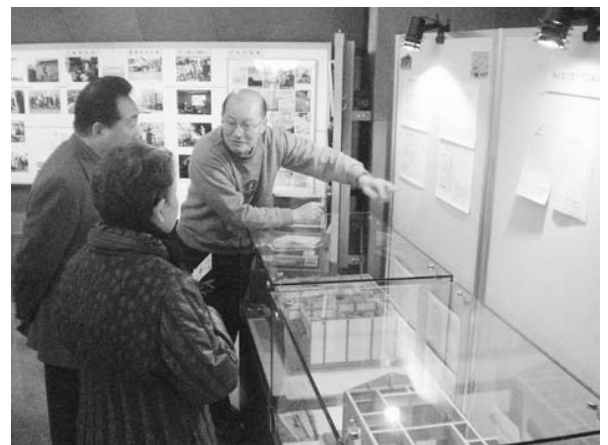


写真3. 太平洋炭礦管理職釧路倶楽部会員による解説

(2) 図録

上記の240枚の写真と解説を、60ページの図録として冊子化した。1000部を作成し、来場者・下記行事参加者・関連博物館・図書館等へ配布した。



写真4. 制作した図録

(3) バスツアー「炭鉱(ヤマ)のくらしをたずねて」

日 時：平成21年11月 8 日(日) 13時～16時30分
参加者：40名
解 説：高崎 隆 氏(太平洋炭硯管理職釧路倶楽部 会長)
佐藤 富喜雄 氏(同 副会長)

太平洋炭硯管理職釧路倶楽部と釧路市立博物館で資料での検討と現地踏査を実施し、旧 太平洋炭硯春採坑(現 釧路コールマイン)・別保坑とその周辺を中心に、その「歴史」「仕事」「くらし」をテーマにコースを設定した見学会を実施した。



写真5. バスツアー(釧路町別保)

(4) フォーラム・講演会「炭鉱(ヤマ)のくらしが教えてくれるもの」

日 時：平成21年11月15日(日) 13時～16時30分
参加者：60名

<講演>

「九州・筑豊の炭鉱文化」：福本 寛(田川市石炭・歴史博物館学芸員)

「ヤマの記憶とマチづくり」：三戸満雄(歌志内市郷土

館ゆめつむぎ支援組織「ゆめつむぎ通信員」会長)

「炭鉱文化の継承とその課題」「地域博物館と市民(グループ)のかかわり」などをテーマとし、講演後はパネルディスカッションを行なった。



写真6. フォーラム

(5) 炭鉱映画祭inくしろ

日 時：平成21年12月 6 日(日) 13時30分～16時
参加者：238名

【上映作品】

「坑道へ向かう声ー男達の結束ー」北海道滝川西高等学校放送局・5分・2009(平成21)年

「明日に燃える太平洋炭硯」太平洋炭硯・28分・1985(昭和60)年

「道東をひらく雄別炭硯」雄別炭硯・27分・1966(昭和41)年頃

「炭都夕張」夕張市・14分・1953(昭和28)年

「歌志内P R映像」歌志内市・28分・1965(昭和40)年

「石炭の採掘」三井田川炭硯・10分・1937(昭和12)年

釧路市所蔵、また田川市石炭・歴史博物館、歌志内市郷土館ゆめつむぎ、夕張地域史資料研究調査室から借り入れた記録映画を上映した。

(6) 炭鉱文化調査の実施

期 間：平成21年10月11～13日
調査先：福岡県田川市およびその周辺

<訪問館等>

田川市石炭・歴史博物館、鞍手町歴史民俗資料館、直方市石炭記念館、北九州イノベーションギャラリー、福智町教育委員会

三井田川・三菱方城・同新入・明治豊国・同赤池等の炭鉱跡(炭鉱遺産)

炭鉱経験者宅(戦時下、国策で釧路炭田〔尺別炭硯〕から筑豊へ移動、そのまま定着)

「語り部事業」の運営手法、各館が取り組む「炭鉱文化」継承とその隘路(特に筑豊の地域性)、今後の産炭地所在博物館等間の協力体制の構築、連携についての検討を行なった。全行程を、田川市石炭・歴史博物館の福

本寛学芸員との合同調査とした。

3-4. 「釧路の炭鉱文化」記録と連携のあり方検討会

「展示等検討委員会」にて、本事業について振り返り、次年度への課題、また将来的な釧路地域の「炭鉱文化」の継承に向けての意見を討議し、今後の指針とした。

日 時：平成21年12月10日(木) 10:00～12:30

出席者：

釧路公立大学経済学部 准教授	宮下 弘美
太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部 副会長	佐藤富喜雄
同 事務局長	照井 茂幸
釧路市総務部地域史料室 主査	山本 修嗣
釧路市立博物館 学芸専門員	戸田 恭司
同 学芸員(主任)	石川 孝織

<検討会での主な意見> (要約作成：釧路市立博物館)

佐藤：これまで炭鉱に関わるパネル展を地域限定でかつ、1日だけの開催という小規模な内容だった。今回、会場が博物館となり、広く公開できたことに意義があったと思う。市民が一般的に炭鉱のこと、石炭のことを知らないということがあらためてわかった。今後、石炭というエネルギーの重要性をPRしていきたい。その意味で、今回は非常にいい機会になったと思う。

照井：今回、写真選定に関わっていた人間の負担は実は大きかった。もう少し負担を減らす工夫が必要だ。

山本：MLA連携(博物館・図書館・アーカイブの連携)を、今回をきっかけに大きく発信したい。

石川：市民の多くは「煌びやかもの」は求めてはいない。また、市民協働することが目的ではなく、何をするのか、なぜ今か、何を目的にするか、博物館の使命は何かということが重要だ。実社会と博物館を結びつける視点が必要だ。

佐藤：これまではOB会自らがやらなければできないと思っていた。今後は知恵を出し合うことで、継続的に資料を公開しながら市民の参加を考えたい。

石川：展示を行ってみて、潜在的に炭鉱への関心がある市民がいることがわかった。市民が情報の受け手側から発信側に変わっていく方法を考えていきたい。

戸田：現状では、資料の保存は太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部の皆さんに頼っている。今後は各所に分散している資料を一元的にみていく必要がある。

佐藤：バス見学会は説明する側の一方向で、駆け足だったので、参加者には物足りなかったのではないかな。参加者との語らいの中でいろいろと充実していくのではないかな。

宮下：石炭という限られた資源をどう知ってもらうかが課題だ。博物館ではメッセージを込めた展示をしてほしい。ここのところ、博物館で開催している炭鉱に関する事業が定着してきていると感じている。

佐藤：今までやってきたことは太平洋炭鉱という、いわ

ば点の状態。第2ステージとしては「釧路炭田」の石炭を知っていただきたい。これは点から線への展開だ。先ほども話したように、一般の人たちが企画に参加してもらいたい。

宮下：博物館の展示は内容が正しいというのが重要だ。それは事実を知りたくて訪れるからだ。

石川：地域を元気にすることが必要だ。展示を見た人が感じた「郷愁」の次には何があるのか、今後探していきたい。

照井：記録映画は年代順に並べていくとその変遷がわかる。世界の石炭へも広げたい。

佐藤：図録の発行が釧路という地域を越えて広がりを作る大きな役割を果たしていると思われる。

4. 成果と今後の展開

4-1. 「炭鉱文化」集積と継承

図録制作は前述のように「目標」であったが、今後へつながる大切なツールとなった。市民の手に広く渡った「釧路炭鉱文化」の記録である。なにより、図録を多くの市民が求め、読み、感想が寄せられた。

事前および期間中には博物館へ写真を中心に資料が多く寄せられた。釧路市内・管内だけでなく、遠くは北見、札幌、東京からも反応があった。またOBが制作した炭鉱住宅模型の寄贈があり、当時の暮らしを伝える大きな力となった。図録に掲載されている写真を見て、「思い出したことがある」と来館され貴重な話をお聞かせくださった方もあり、また涙を流しながら読んでいたOBの姿もあったという。

来場者も同様に、他の企画展に比べて「三世代」「親子」「孫と祖父」といった組み合わせが多い傾向があり、展示の前で一生懸命説明する姿、またかつての職場の仲間との再会、炭鉱住宅の暮らしを展示解説にあたっていた太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部会員に熱心に尋ねる若い世代など、世代間交流の場として博物館が大いに賑わった。

なにより、「炭鉱のことは博物館が情報を求めているらしい」「炭鉱ばかりでなく、(釧路の)こんな情報があるけれど、博物館に知らせておこう」と、博物館が再び認識され、生活の中で埋もれていく貴重な資料と情報の集積地として活用していただける流れが出てきたことは、確実である。地域博物館再生への足がかりとなったといっても、過言ではない。

博物館に寄せられる情報は、多くは断片的で小さな情報である。その情報が集積されることは、これまで明らかになっていなかったこと、あるいは誤った「定説」を覆すことも可能で、すでにいくつかの実例もある。社史や労働組合史には記されない記憶を、市民の認識が高まったいまこそ集積する好機である

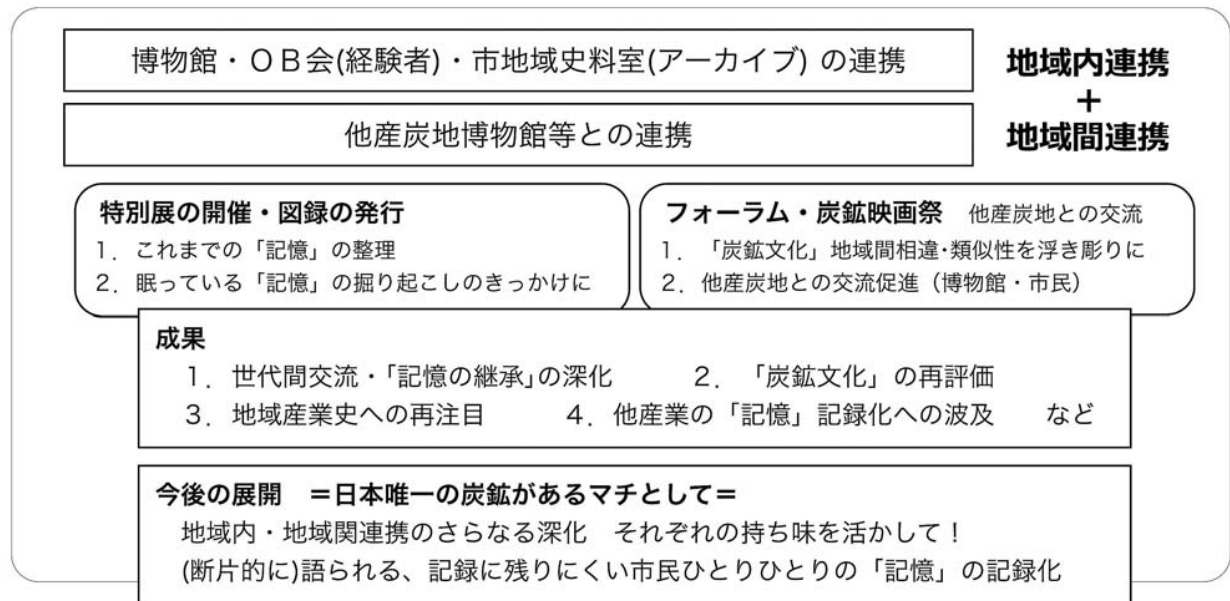


図3. 本事業の成果と今後の展開

4-2. 連携の深化

フォーラム、そして炭鉱映画祭では、炭鉱文化の相違・類似（地域性と汎地域性）に想像以上に関心が集まった。その比較は自らの地域の姿を明らかにする。

炭鉱文化の地域間「相違・類似」比較は、地域博物館の連携がその理解を大きく前進させることができる。所在地域の理解のために、積極的に比較対象地域に出かけ、ともに学びあう交流と情報集積を行なう必要がある。それは、学芸員の力量も向上させる。炭鉱は石炭の賦存状況から北海道と九州に多くが集中するため、大学研究者を除けば、1,500kmも離れている両地域をまたがっての研究交流は困難があった。

平成22年2月20日より3月28日まで、田川市石炭・歴史博物館との共催で、交流企画展「北と南を結ぶヤマ(炭鉱)ー石炭産業の過去・現在ー」を開催したが、これも、地域間連携が生んだ展示である（田川市石炭・歴史博物館では、21年8月1日～9月13日開催）。

釧路炭田と筑豊炭田の幾重にもなる交流が主テーマであるが、特に戦時中の「急速転換」（海上輸送困難となった釧路炭田から、筑豊・三池炭田へ炭鉱労働者を移動させた政策）について取り上げている。その経験者はすでに80歳を超え、聞き取りは喫緊の課題である。現在、これに博物館と太平洋炭硯管理職釧路倶楽部副会長の佐藤富喜雄氏により調査研究を進めている。

この経験者から電話や来館が多くある。「博物館が炭鉱情報を集めている」という理解が、これまでの取り組みでいっそう明確に認識されていることに他ならない。北海道・西日本・東京の各紙、NHK等で、この「急速転換」についての取り組みが報道され、それらも追い風となり、さらに情報が集まりつつある。また筑豊での情報収集は、連携した田川市石炭・歴史博物館学芸員と、

その学芸員が筑豊に持つネットワークの活用が、地域間連携の深化で可能となった。

平成22年度は、連携と交流の促進を目的とした交流企画展を開催し、連携館等との交流により相互発信での情報・資料・写真等の展示公開を検討している。平成22年2月現在、夕張地域史資料研究調査室、いわき石炭・化石館、常磐炭田史研究会、志免町教育委員会、田川市石炭・歴史博物館との連携を進めており、今後もその深化と拡大を図っていく。これら集まった情報は連携館で共有し、それぞれに活用を図る。このことで、各館の所蔵資料の特徴もあきらかにし、今後の大規模な展示や共同調査への足がかりとする。同時に、緩やかな連携と情報交流、炭鉱文化継承のあり方をともに考える「全国炭鉱文化博物館ネットワーク」（仮称）を構築していくこともあわせて検討していく。

・謝辞

本事業は、文化庁、太平洋炭硯管理職釧路倶楽部、釧路市総務部地域史料室（特に文中に記した編集委員、検討委員）、各共催・協力団体の理解と支援、また当館各職員の連携によって実施した。文末であるが、ここに記して御礼申し上げる。

注.

（1）ただし、一次エネルギーのうち石炭のシェアは減少したがその後消費量は増加し続けている。「エネルギー革命」は、単なる石炭から石油へのエネルギーソースの変化ではなく、国内炭鉱のスクラップとエネルギーの輸入依存（石炭も含め）である。

（2）たとえば、釧路新聞「巷論」平成21年12月12日